

ずいそう

難し，コロナ

永井 修



42年前の7月29日16時40分、私は機上の人となりアフリカ ケニア共和国のナイロビに向かっていった。

パキスタン航空南周りで、成田・マニラ・バンコク・カラチ・ジェダ経由でケニヤッタ空港に向かう便である。

初めての海外、旅行期間30日間、一人旅、英語力ほぼ0、野宿、所持金32万円、世間知らずの学生であった私にとっては大冒険であった。

旅行中には衝撃的な体験が沢山あり、負の意味でカルチャーショックを受けた。

最初のショックは、カラチでトランジットした時である。街に出てみるとカースト制度なのか貧富の差が激しく街角には手足の無い小さな子供がいて、いや、置いてあると言った方が正解かもしれないが子供の前に空き缶が置いてある状態だったり、肩を叩かれるので振り向くと、中年の女性が物乞いをしてくるその顔は、何かの怪我だろうか唇が無く八重歯が突き出ている、到底日本では見かけない人達が多かった。

その近くの金細工店では、真っ白い服を着た人が金製品を買っている、これがパキスタンの現状かと思うと自分が育った日本という国の有難さを感じながらも日本の街には無いエネルギーや厳しさを感じた。

生きる為のエネルギーというものがあることを初めて知ると共にこれから先の旅に大きな不安を抱いた瞬間であった。

ナイロビに到着したのは夜になりホテルに着いたのは夜中だったので街の様子は分からないまま朝を迎えた。

朝、そこには穏やかでゆっくりとした時間が流れていた。小鳥が囀り人々はこのんびりと歩いている、東京の朝では観られない光景である。

安心した私は、マーケットに行ってみた。魚・野菜・肉類・服飾・生活用品などを売っている市場である。人々は買った物を包装することもなく受取り、そのまま買い物籠に入れて持ち帰っていた。

日本では有名ブランドの袋を自慢げに持ち歩いていた時代である。もちろんナイロビでも高級デパートでは包装されたていたようだが、中産階級の人々は紙

に包む程度で昼食は弁当箱ではなくビニール袋に入れて持ち歩いていた。今思えば、レジ袋が海洋汚染問題になる事から法制化している42年経った現在の日本は42年前のナイロビに見習うべきことがあるようにも思われる。

マーケットを歩いていると一際、背の高いケニア人に遭遇した。彼は、手に槍と盾を持ち背筋を伸ばしゆっくりと歩いて来る。その姿は威厳と誇りに満ちていて堂々とし神々しくもある。

知見の無い私にも、はっきりとマサイ族であることが解る。槍は模造品では無く本物を持ち民族衣装を着込み首都ナイロビのマーケット内を歩いているのに誰も驚きや恐怖を感じている様子はない。

新宿の歌舞伎町を、この様な姿で歩いている男がいたなら、真っ先に警察官が駆け寄ってくるのではないだろうか、にも拘わらず誰もが平然としている。これも驚いた。

調べてみるとマサイ族はケニアとタンザニアの国境付近に住む先住民であり遊牧民である。ケニア独立から15年も経ち資本主義体制が敷かれている社会で武器を持ち歩くマサイの男が咎められない社会とは、どういう社会なのか、ケニアの国旗のど真ん中には、マサイの民族旗と同じデザインである盾と槍が描かれていることから、先住民であるマサイの人達に対する敬意が有るのかも知れない。

私は、ナイロビに到着してから2日間滞在しセイシェル諸島に向かい1週間ほどダイビングをしていた。その後、ナイロビに戻り今度はモンバサ・マリディに向かい又もやダイビング三昧の生活をした。この間は、ほとんど野宿生活をしていたが、夜中に現地の若者に奇声を上げられたり、テントの外に置いていた古タイヤを加工したスリッパが盗まれたり、写真を撮った人に写真を送るので住所を聞くと住所とは何だと聞かれたり、ある意味新鮮で平穏な旅を過ごしていたが、印象的だったのが途中立ち寄ったナイロビ国立公園の入口にある動物の保護施設である。ここは日本の動物園と似ているが傷付いた動物や群れから逸れた動物たちを一時的に保護している場所で、居たのはシマウマ・インパラ・キリン・ライオンだったと思う。

特にライオンの目は眼光が鋭く、日本の動物園で見たアクビをしているライオンとは迫力が違っていた。こちらを見ている眼には生命力があり恐怖を感じたものだ。

マリンディからナイロビに帰る為にモンバサへ到着した時、初代首相であり初代大統領でもあるジョモ・ケニヤッタ氏が老衰で在任中に亡くなったニュースが流れていた。ケニヤ共和国の創立者であるケニヤッタ氏はムジイ（スワヒリ語でおじいさんの意味）の愛称で呼ばれている人物で、国中が1週間の喪に服することである。この日から町中の食堂が全て閉鎖となり食事をする処が無くなってしまった。食堂は、キヨスクと呼ばれ、街のあちこちに在り、ウガリ（トウモロコシの粉と雑穀を湯がいたもの）とゴンベッサ（コブ牛の肉をトマトと塩で煮込んだもの）を注文して50円程で腹いっぱいになれる。私にとっては有り難い食堂だが、その日から外国人向けのホテルでしか食事が摂れなくなったし、政権を握っているキクユ族に対抗する勢力が暴動を起こすと噂が流れたりして、不安で緊張した日々が始まった。早々にナイロビに帰って来たが首都であるナイロビは兵士が町中に溢れていて小銃を持っている。小銃などは今までに見たことも無く、某マンガで見たM16という銃に酷似しているように思えた。これが機関銃なのかは知らないが、街中にいる兵士が持っていることから、私には今にも戦争が始まるように見えていた。結局、小競り合いはあったようだが暴動は起きず、私が帰国する日が来た。帰国当日、ケニヤッタ空港に到着した私は、最悪の事態を迎えることになった。

ケニヤッタ空港に着いた私の所持金は2000円程度しか無く、非常に不安な気持ちで保安検査ロビーで待っていた。

その時、背が高くがたいの良い制服を着た男が近づいて来て、「あそこの免税店でウイスキーを買って来てくれ」と頼まれた。これを聞き私は小賢しい事を思い付く。

これは彼のアルバイトだ、ならば報酬を貰って旅費の足しにしようと企み、彼に1000円を要求した。これが最悪の事態を招くことになってしまう。

彼は激怒し、大きな声で罵り立ち去って行った。解つ

たのは「悪い奴」という単語だけで、私は商談決裂ぐらいにしか思わず、保安検査の場所へ向かっていた。

検査場に彼がいた。彼は私を見付けると指を指し同僚に何か話している、「悪い奴」という単語だけ聞こえた。順番が来てX線検査を通過する前に止められ上着・ズボン・靴を脱ぐように命令され、下着姿の私はX線検査機を通過した。周りには各国の旅行者が大勢いる前で、とてつもない屈辱を感じながら手荷物検査を通過し、搭乗口の前で待っている私の前に、又、彼が兵隊を一人連れて来て「こいつは悪い奴」と兵隊に言ってみ張らせる。若い兵隊は笑みを浮かべながら私の前に立ち、M16に酷似した小銃の銃口を私の胸元に時折向ける長い時間が過ぎて行った。

まるでテロリストの様な扱いをされケニヤッタ空港を後にして成田に帰って来た時は安堵感に包まれていた。

初めての海外旅行を終えて得た事は、最果ての地に投げ出されても生き抜ける自信が付いたことだろうか。どんな地の人も優しさ、厳しさを持ち土地の風習に従う者を受入れ、従わない者を拒絶するように感じた旅行でもあった。

この旅行でナイロビに滞在した期間は何日もなかったが、ナイロビ滞在中にお世話になった日本人コーディネーター遠藤さんの自宅に泊まらせて頂き、酒を呑みケニヤの魅力や人生観について聞かせてもらったことが現在の私のベースにあるように感じている。

遠藤さんが言った「30年後にナイロビへ来てください、アフリカの文化、経済の発展を見ることが出来ますよ。これは欧米では見ることでできない貴重な体験ですよ」。これが、彼との約束となり今年6月に会いに行く予定にしてチケットまで取っていたのだがコロナ禍の中、断念するしかない中で、この随想を書き始め苦闘しているうちに8月25日に大腸がんで人生の幕を降ろされたという訃報が知人を介して入って来た。もし、もしコロナさえなければと悔しさが募るばかりであるがコロナ禍が治まればナイロビの地に花を手向け墓前で私の人生を語り遠藤さんの感想が聞きたいと強く思う日々である。